

令和 2 年 6 月 6 日現在

機関番号：33111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26463542

研究課題名(和文)在宅療養者の災害対処行動とあきらめの気持ち・対処行動の理論モデル構築

研究課題名(英文)Construction of Theoretical model for disaster coping behavior: giving up feeling of home care patients during a disaster.

研究代表者

宇田 優子(Uda, Yuko)

新潟医療福祉大学・看護学部・教授

研究者番号：70597690

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：病者が持つ災害の備えを抑止し阻害する「あきらめ」の気持ちと支援者の受け止めを明らかにし、在宅神経難病患者に特化した災害対処モデルの構築を目的に、「災害対処行動を「あきらめ」る気持ちの分析、支援関係者への調査、「在宅療養者の災害対処行動の理論モデル構築」を目的とした。結果は「あきらめ」る気持ちは老年的超越による生と死の価値観の転換と社会が高齢者に自立を求める現実が影響していた。外来看護師に調査を実施、外「来における災害への備え支援は1割程度と低い、「薬と物を備える」「身体を備える」「人を備える」の3キーワードから在宅療養者の災害対処行動理論モデル(案)を構築した。継続して検証する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2011年東日本大震災以降の10年間で、2016年熊本地震、鳥取県中部地震、2018年北海道胆振東部地震や2013年台風18号、2015年関東東北豪雨、2019年台風19号被害と大規模災害は発生し、命を守る行動を国民は求められている。しかし、避難せずに自宅に留まり被災する高齢者は多数存在する。本研究は神経難病患者に限らず、避難行動や災害備えを「あきらめ」る高齢者の理解、災害備え行動を促進・支援の基盤となる研究で、災害の多い日本では社会的意義は高い。

研究成果の概要(英文)：To clarify the feeling of "giving up" by patients and supporter's acceptance that deters and prevent the disaster preparedness of patients, and to construct a disaster coping model specialized for patients with intractable neurological disease at home, we conducted (1) Analysis on why patients "give up" disaster response actions, (2) Interview survey with support personnel, (3) constructed "Theoretical model construction of disaster coping behavior of home care workers". The results were as follows: (1) The feeling of "giving up" was influenced by changes in values of life and death due to the transcendence of old age and the reality that society requires the elderly to be independent. (2) survey on outpatient nurse reveals their disaster preparedness was low at around 10%. (3) constructed a theoretical model for coping with disaster response of home care patients from 4 keywords: drug-equipped, body-equipped, human-equipped, and commodity-equipped. We will continue to verify it.

研究分野：災害看護

キーワード：災害への備え 外来看護 神経難病 老年的超越 あきらめ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2011年東日本大震災を契機に災害看護研究は活動実践研究を中心に飛躍的に取組みが進んだ。しかし、2014年までの研究は発災後の看護職の活動報告が中心であり、患者の「災害対処行動」の研究は特定の医療機関内における小規模な研究¹⁾がされているのみであった。

一人で避難できない要介護状態、特に医療依存度の高い在宅療養者への災害時の支援方法は研究が進み、療養者へ具体的な支援を行っていた²⁾。しかし、対象者は人工呼吸器装着者等が中心で、それ以外の在宅療養者への支援体制は内閣府が作成した「避難行動要支援者の避難行動支援に関する取り組み指針」³⁾を基に、避難支援を中心に整備途中であるが具体的な運用方法は今後の課題であった⁴⁾。

研究者は、2011～2013年度の科研費研究によって、「パーキンソン(以下、PD)病患者に対する『災害への備え』教育の継続システム構築に関する介入研究」を行った。その結果、「友の会会報」「医療保健関係者」からの直接の働きかけは『備え』行動を促進させるという結果であった⁵⁾。しかし対象者の4割は対策をとっておらず、対策を行わない要因は知識や情報、行動力不足だけではなく、対象者は「災害時に動けなかったら避難しない、自分の家でそのまま居たい(死にたい)」という「あきらめ」の気持ちを有していることが明らかになった⁶⁾。

災害対処行動を「あきらめ」ている事実は、先行研究でも指摘されていた⁷⁾が詳細に分析している研究は無かった。また、そのような気持ちを有している対象者を支援する支援者は、それをどのように受け止め、対処しているかを明らかにしている研究も無かった。パーキンソン病患者がもつ身体像を、亀石らは「自分の思い通りにはいかない身体」「じわじわと迫ってきている病気の進行」「その時々で寿命や死を知覚する身体」と表現している⁸⁾。死を意識しつつ進行性の病気とともに生きているパーキンソン病患者は、「自力で逃げることができない」「避難所の集団生活は難しい」ことを想像し、「あきらめる 災害に備えない」気持ちを有している群が一定程度存在すると仮定した。

保健医療看護学分野以外で、一般住民を対象とした災害リスク回避行動モデル等の研究も行われているが、病者を対象とした説得力のある理論は検証されていない。本研究は、越智ら⁹⁾の研究で災害リスク回避行動の理論モデルにおいて、一般住民を基本にしながらも患者への活用可能性と未知な影響因を述べていることを踏まえ、災害リスク回避行動の理論モデル⁹⁾には注目されていない、「病者が持つ災害の備えを抑止し阻害する『あきらめ』の気持ち」と周囲の支援者の備えを促進させる支援を明らかにし、在宅療養者に特化した理論モデルの構築を目的とした。

2. 研究の目的

本研究は、在宅療養者(主にPD患者を対象)がもつ、災害対処行動を「あきらめ」る気持ちの分析、支援者の対応の分析、「在宅療養者の災害対処行動の理論モデル構築」を目的に、5か年計画で行うこととした。

3. 研究の方法

(1) 「あきらめ」の概念分析

2011年～2013年に保健・医療・福祉の研究分野では「あきらめ」をどのように定義しているか明らかにすることを目的に、文献検討をおこなった。

(2) PD友の会会員で被災体験があり、「あきらめていない」積極的に備えを行っている新潟県及び宮城県会員17人に半構造化面接法によりデータを収集した。質的記述的デザインの修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)により分析した。半構造化面接は

2015年3月から2016年7月に実施した。

(3) 「あきらめ」の気持ちを有する会員をスノーボールサンプリングと、新潟県及び宮城県PD友の会総会で募集を行った結果、対象者は1人*¹⁾であった。そのため、2011～2013年度の科研費研究(JSPS科学研究費23593415)で行った患者アンケート調査の自由記述の内容の分析を追加した。

* (4) の対象者である

方法はPD友の会9道県支部会員全数1,398人に2013年3～9月に行った郵送自記式質問紙調査の「災害対策について心配なことやご意見」の自由記載欄の記述を質的帰納的方法で分析した。

(4) PD友の会会員で被災体験があり、「あきらめ」の気持ちを表現した会員1人に対し半構造化面接法によりデータを収集し、SCAT(Steps for Coding and Theorization)による手法で質的に分析を行った。

(5) 災害の備えを促す支援者として、PD患者が定期的・長期にわたり通院する病院の外来看護師を対象に、備え支援の実態と可能性を調査した。2018年6～8月に神経内科外来を有する全国の病院1,754の神経内科外来看護師等を対象に、外来看護場面において災害への備え支援は可能か、自記式郵送調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 高齢者の「あきらめ」の概念

先行要件は「思うように体を動かせない」「認知機能の低下」「時代背景からくる社会通念」「現在ある障壁が取り除かれたいと信じる」「孤独感」「夫との悲哀の作業」、死別からの「経過時間」の7カテゴリに分けられた。属性は「対処できない」「何もできない」「仕方がない」「不可能と決めつける」「自信がない」「自己肯定感が持てない」「受け入れる」の7つであり、帰結として何もせずに「流れに身を任せる」衝突しないように譲る、妥協等の「折り合いをつける」「自分の思いを表出しない」「何もしない」等の無力感や絶望感からくる否定的側面と「発想の転換をする」「価値観の転換をする」等の自分の気持ちの折り合いが付き、考え方を変化させている肯定的側面の2つを見出した¹⁰⁾。

(2) 災害の備えを背極的に行っているPD患者の特徴

災害の備えをPD患者と共有するキーワード3点を見出した。

「あきらめない」という生き方をしているPD患者の特徴は、配偶者や家族を支えとして日々前向きに生き、災害時に避難することもあきらめていなかった。災害への備えは「薬・物を備える」だけでなく、「体を備える」「人を備える」という3つのキーワードとして、理論化を行っ

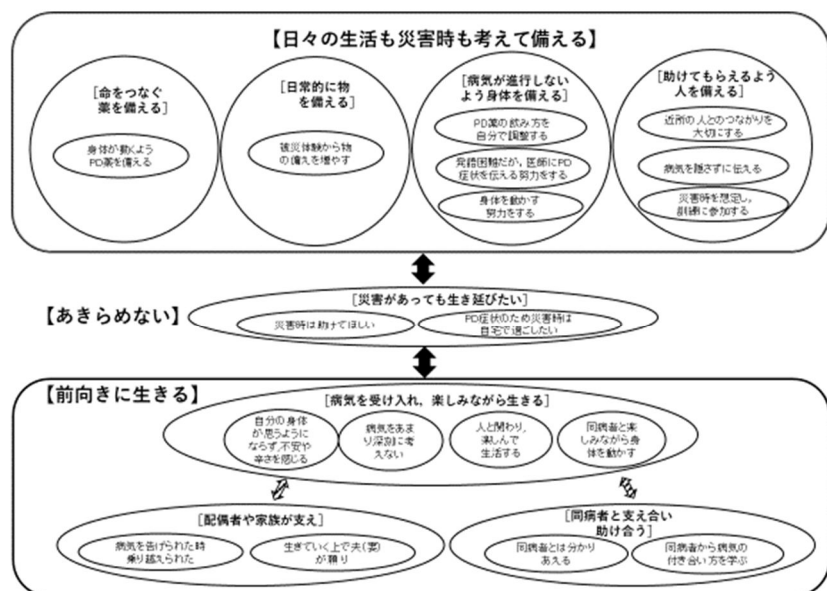


図1 在宅パーキンソン病者の災害に対する備えとその経緯

→ コアカテゴリ間の動き ⇄ カテゴリ間の動き

た(図1)¹¹⁾。

(3) 自由記載欄の記述を質的帰納的方法で分析した結果

あきらめの気持ちと関連するカテゴリーとして、「一人では逃げる事が難しい」「私にかまわず逃げてほしい」「災害時に援助を受けるのは難しい」「避難生活は難しい」「災害や災害の備えは考えられない」の5つであった。災害への備えをしていない背景の多様性が明らかになり、PD特有の症状等から避難することや避難行動の支援を受けないことを選択する可能性があることが明らかとなった¹²⁾。

(4) 災害時は「逃げない」と意思表示する高齢PD患者の言葉の背景を、以下のように理論記述として構築した。

遭遇希少な災害に対する継続的な備え行動の困難性がある

病と老いの自覚により自立した避難行動の断念

老年的超越の一側面

の3点である。研究対象者は高齢期の発達である老年的超越の側面を有して、死の恐怖感が薄れ、成熟した高齢者として内面では穏やかな気持ちで、「逃げない」と発言していると考えた。しかし、その思いに至る背景として日本社会の高齢者に対する自立を求める厳しい視線や高齢者心理の理解不足も存在していると考えた¹³⁾。

(5) 支援者の対応の実態

回収率 21.2% (371 部)、有効回答率 81.4%(302 部)、看護外来を含む外来での個別の療養相談有りは 20.2%、災害の備え指導実施有り 10.9%であった。「災害拠点病院」「個別の療養相談有り」「外来患者受持ち制有り」で災害の備え指導を有意に実施していた。未実施病院看護師も 81.4%が災害の備え指導は必要であると認識していた。しかし、外来での災害の備え指導の実施病院を増やしていくには、外来看護部門の人員配置の改善、看護職が短時間で災害の備え指導を実施可能にする教材の開発、外来患者に対する災害の備え指導を病院全体及び全外来で取組む方法の開発や提案、が課題として明らかになった¹⁴⁾。

(6) 研究成果のまとめ

災害時の避難や備えについて「あきらめ」の気持ちを有する高齢PD患者は一定程度、存在しているが、平時において自ら発言する人は少ない。支援者は「あきらめ」という否定的側面に着目しがちだが、肯定的側面も捉えて関わることが重要である。特に老年的超越の側面を有する場合は、対象者の成長を見守り尊重することと、ADLの自立を求めすぎない態度が重要である。そして災害への備えや避難支援は支援者側のリードが必要となる。

災害の備えをPD患者に促す場合、キーワードとして【薬・物を備える】【身体を備える】【人を備える】の3点を分かりやすく働きかけていくことが重要である。引き続き、キーワードを活用した支援方法の開発を行う予定である。

病院の外来看護部門において看護師からの災害備え支援活動は条件を整えることで可能であり、看護師も必要性を認識していることが分かった。実施可能となるように、今後も研究を継続していく予定である。

文献

- 1) 濱田清美、佐藤亜也子他：外来患者・家族を対象とした災害講習会の実施～減災塾に取組

んで～ 日本災害看護学会誌Vol.10、No.1 p146、2009

2) 西澤正豊他：災害時難病患者支援計画を策定するための指針、厚生労働科学研究費補助金、2008

3) 内閣府（防災担当）：避難行動要支援者の避難行動支援に関する取り組み指針 2013.5

4) 内閣府：災害時要援護者の避難支援に関する検討会報告書、2013.5

5) 宇田優子他：在宅パーキンソン病患者の災害への備え-薬備蓄を中心に-、日本公衆衛生学雑誌Vol.60 NO.10 P532

6) 石塚敏子、宇田優子他：パーキンソン病患者の災害発生時の困難さと災害の備えに関する研究、新潟医療福祉学会誌Vol.13、NO.1 p67、2013

7) 中井寿雄、森下安子：医療的ケアの必要な要介護者における災害に対する備えの認識、日本災害看護学会誌Vol.13、No.1 p245、2013

8) 亀石千園他：パーキンソン病患者がもつ身体像、日本看護科学会誌Vol.33、No.2 p51-61、2013

9) 越智祐子、ニコル・コマファイ、立木茂雄：災害リスク回避行動の実証モデル構築の試み-災害時要援護者支援の視点から- 地域安全学会論文集NO.10、2008.11 p465-472

10) 稲垣千文、宇田優子、石塚敏子、三澤寿美：保健・医療・福祉分野における「高齢者のあきらめ」の概念 災害の備えを阻害する「あきらめ」の気持ちの検討 - 第1報 -、日本災害看護学会誌Vol.17、NO.1 p193、2015

11) 石塚敏子、宇田優子、稲垣千文、三澤寿美：在宅パーキンソン病者の災害に対する備えとその経緯、日本災害看護学会誌Vol.21 NO.3 p25-36、2020

12) 宇田優子、石塚敏子、稲垣千文、三澤寿美：在宅パーキンソン病患者の災害に対する考え～質問紙調査の自由記載の分析～、日本難病看護学会誌Vol.24、NO.2 p203-212、2019

13) 宇田優子、石塚敏子、稲垣千文、三澤寿美：災害時は「逃げない」と意思表示する高齢神経難病患者の言葉の背景 - 1事例のSCATによる分析 -、新潟医療福祉学会誌Vol.19、NO.3 p22-29、2019

14) 宇田優子、稲垣千文、石塚敏子、三澤寿美、瀧口徹：外来看護部門で災害の備え指導は可能か - 神経内科外来への全国調査結果 -、日本難病看護学会誌Vol.24、NO.3 p261-269、2020

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 yuko uda・Toshiko Ishizuka・Sumi Misawa・Nobuko Murayama・Toru Takiguchi	4. 巻 15
2. 論文標題 How to promote a stockpiling of medication for disaster preparedness among Parkinson's disease patients receiving home care services	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Niigata journal of health and welfare	6. 最初と最後の頁 0
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石塚敏子、宇田優子、稲垣千文、三澤寿美	4. 巻 21
2. 論文標題 在宅パーキンソン病者の災害に対する備えとその経緯	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本災害看護学会誌	6. 最初と最後の頁 25/36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宇田優子、石塚敏子、稲垣千文、三澤寿美	4. 巻 24
2. 論文標題 在宅パーキンソン病患者の災害に対する考え ～質問紙調査の自由記載の分析～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本難病看護学会誌	6. 最初と最後の頁 203.212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宇田優子、石塚敏子、稲垣千文、三澤寿美	4. 巻 19
2. 論文標題 災害時は「逃げない」と意思表示する高齢神経難病患者の言葉の背景 - 1事例のSCATによる分析 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 、新潟医療福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 22・29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宇田優子、稲垣千文、石塚敏子、三澤寿美、瀧口徹	4. 巻 24
2. 論文標題 外来看護部門で災害の備え指導は可能か - 神経内科外来への全国調査結果 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本難病看護学会誌	6. 最初と最後の頁 261・269
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 宇田優子、稲垣千文、石塚敏子、三澤寿美
2. 発表標題 神経内科外来における「個別の療養相談」の実態 (全国調査)
3. 学会等名 日本難病看護学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宇田優子、石塚敏子、稲垣千文、三澤寿美
2. 発表標題 「災害時は私にかまわず逃げて、病人は覚悟ができてから」と言われたら、どうしますか?
3. 学会等名 第2回日本パーキンソン病 कांग्रेस
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石塚敏子、宇田優子、稲垣千文、三澤寿美
2. 発表標題 家族以外にパーキンソン病のことをどう伝えていますか
3. 学会等名 第2回日本パーキンソン病 कांग्रेस
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石塚敏子、宇田優子、石塚敏子、三澤寿美
2. 発表標題 パーキンソン病患者さんからのメッセージ - 薬を飲んで、主治医に自分の症状を伝えよう-
3. 学会等名 第2回日本パーキンソン病 कांग्रेस
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 三澤寿美、宇田優子、稲垣千文、石塚敏子
2. 発表標題 災害への備え：あなたは何を備えますか？
3. 学会等名 第2回日本パーキンソン病 कांग्रेस
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宇田優子、稲垣千文、石塚敏子、三澤寿美
2. 発表標題 パーキンソン病患者の災害への備えに関する研究（第三報）
3. 学会等名 日本災害看護学会 第19回年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宇田優子
2. 発表標題 パーキンソン病在宅療養者の災害への備え
3. 学会等名 全国パーキンソン病患者友の会新潟県支部総会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 三澤寿美、稲垣千文、石塚敏子、宇田優子
2. 発表標題 パーキンソン病患者の災害に対する備え - 「あきらめない」患者の病気の受け止めと備え行動-
3. 学会等名 日本災害看護学会第18回年次大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 宇田優子
2. 発表標題 災害への備え
3. 学会等名 第20回 全国パーキンソン病友の会 新潟県支部定期総会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 稲垣千文・宇田優子・石塚敏子・三澤寿美
2. 発表標題 保健・医療・福祉における「高齢者のあきらめ」の概念 災害の備えを阻害する「あきらめ」の気持ちの検討 第1報
3. 学会等名 日本災害看護学会第17回年次大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 三澤寿美・宇田優子・石塚敏子
2. 発表標題 「災害への備え」に関する調査報告
3. 学会等名 第1回パーキンソン病 कांग्रेस
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 稲垣千文・宇田優子・石塚敏子・三澤寿美
2. 発表標題 保健医療福祉における「高齢者のあきらめ」の概念-災害の備えを阻害する「あきらめ」の気持ちの検討 第1報-
3. 学会等名 災害看護学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 宇田優子・三澤寿美
2. 発表標題 パーキンソン病患者に対する災害への備え調査について
3. 学会等名 全国パーキンソン病友の会宮城県支部総会・講演会（招待講演）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 宇田優子・石塚敏子・稲垣千文
2. 発表標題 パーキンソン病患者に対する災害への備え調査について
3. 学会等名 全国パーキンソン病友の会新潟県支部総会・講演会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 三澤寿美・宇田優子・石塚敏子
2. 発表標題 災害の備えに関する調査報告
3. 学会等名 第1回パーキンソン病 कांग्रेस
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 宇田優子 編著金子仁子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 14
3. 書名 行政看護学 健康危機管理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	三澤 寿美 (Sumi Misawa) (10325946)	東北福祉大学・健康科学部・教授 (31304)	
研究分担者	石塚 敏子 (Ishizuka Toshiko) (80339944)	新潟医療福祉大学・看護学部・講師 (33111)	
研究分担者	稲垣 千文 (Chihumi Inagaki) (10645716)	新潟医療福祉大学・看護学部・講師 (33111)	